

## 存在感のある研究所に向けて

世に研究所の寿命は10年といわれる。いかに優れたアイデアで設立された研究所でも10年もたてば色々不具合が出て、新鮮さと活力に衰えが出るものだという事なのだろう。中部大学生物機能開発研究所は2000年4月に開設されたので、本年3月で丸6年を経過したことになる。いわば脂の乗った元気いっぱいの活力に満ちた研究所であることが期待されている時期にあるわけだが、その現状はいかかなものだろうか。

中部大学には現在7研究所が存在するが、その多くは専任の研究者も研究用のスペースもない、いわばバーチャルな施設である。生物機能開発研究所もそのひとつだが、2001年の応用生物学部発足とともに学部の研究領域を支援する機構として機能してきた。つまり2001年に食品機能プロジェクト、先端生命プロジェクト、環境評価プロジェクトの3プロジェクトがスタートし、学部のほぼすべての教員が何れかのプロジェクトに所属し研究を遂行する体制が作られたのである。その中から食の安全に関わるプロジェクトが提案され、2002年度にハイテクリサーチ整備事業として採択されるとともに研究用空間として32号館が完成した。実はこのプロジェクトは、採択されるとともにバイオサイエンス研究センターとして独立した機構となり、研究所からは離れることになった。さらに、2005年には、先端生命プロジェクトの植物の発生・形態形成研究グループが中心になって作成された提案がフロンティア推進事業に採択され、植物バイオ研究センターとして独立した。2005年には本学初の寄附部門として健康食品科学部門が発足し、設立の経緯から生物機能開発研究所の所属となった。現在5名の専属スタッフを擁し独自の研究を遂行しつつある。また環境評価プロジェクトは、恵那キャンパスを中心とした東海丘陵要素植物群落をめぐる広い角度からの解析を行い地域に密着した新たな視点をもたらした。

このような経過を振り返ると、センターとして独立はしているが、研究所から生み出されたプロジェクトが活発に活動しており、まさに成長期の逞しさが感じられる。問題はこの活力をいかに保ち、さらに発展させ研究所としての存在感を高めるかにあるといえよう。バイオサイエンスセンターは2006年度に5年時限の最終年度を迎え、成果の取りまとめの段階に入る。その成果を取り込みより魅力的なプロジェクトを立ち上げるべく、研究所では新たに生理活性物質・糖質プロジェクトが進行している。寄附研究部門、応用生物学部、関連研究をもつ生命健康科学研究所、さらには2006年度開設される生命健康科学部の研究者とともに、10年目の2010年を待たずして中部大学にこの研究ありといわれるような知の発信拠点を創造したいものである。その成果は必ずや優れた教育の基盤となるであろう。

関係諸氏の変わらぬご支援、ご鞭撻を心よりお願いいたします

2006年3月

生物機能開発研究所

所長 永井和夫